

コロナ禍で育つ乳幼児のために できること

ひろせ
廣瀬はる

(東京都／私立学習院女子高等科二年)

1. はじめに

「人間は他の哺乳類動物より一年、生理的早産である」——これはスイスの生物学者アドルフ・ポルトマンの言葉である。人は一人では生きていけない状態で生まれることを意味する。そして人は一年早く生まれてくることによって、他者との「関わり」を基本とする社会的環境に適応し生きていく力を身につけていく。

ソーシャルディスタンスが求められる生活は、新型コロナウイルスとしての「非日常」からいつしか「日常」となった。コロナ禍で急速に発展したオンラインによるコミュニケーション、仮想空間などを、私たちはもう手放すことができないだろう。そのよ

うな中、私は最近、「コロナ禍に育つ乳幼児の言語機能の発達が大きく遅れている」という研究結果に衝撃を受けた。米・ブラウン大学・シヨーン・ディオール博士は、〇歳から三歳までの乳幼児の言語機能が、基準値の一〇〇を大きく下回る六〇であったとの研究結果を昨年発表している（注1）。その後もコロナ禍は続いており、アメリカと比べてよりソーシャルディスタンスが守られている日本においては、乳幼児の発育にさらに大きな影響があるのではないかと危惧される。また、現実社会でのコミュニケーションの減少は、パンデミックが過ぎ去ったあとも、乳幼児の成長に影響を及ぼす可能性がある。

コロナ禍における乳幼児の成長に影響を与えた要因として、以下の三つが考えられ

る。一つ目は、感染拡大対策のために、乳幼児が人と密にふれあう機会が減少したこと。また、皆がマスクをしていて人の表情が見えないこと。二つ目は、急激なオンライン化により、リアルなコミュニケーションが減少したこと。三つ目は、コロナ禍において産後うつが急増したことである。

コロナ禍で育つ乳幼児の発育の遅れという問題を社会全体で共有し、乳幼児のまっとうな発育を早急に取り戻すことが必要だ。本小論文では、乳幼児の成長の仕組みをまとめたい。最近明らかになりつつある、コロナ禍における乳幼児の発育への影響を取り上げ、コロナ禍に育つ乳幼児の成長を助ける方策について考えを述べていきたい。

2. よく見て真似をしながら学ぶ乳幼児

乳幼児は、人の表情や口元をよく見て真似をしながら、言葉と人の心を学ぶ。また、人とふれあう経験から人と共に豊かに生きていく術を身につける。

新生児は生後三日目にして、目と口が配置された顔らしい図形を長く見つめ、目を逸らした顔ではなく自分を見つめる顔に注意を向けるという（注2）。〇・〇二ほど

の視力しかない新生児は、必死に目の前の顔や表情を見ようとしているのだ。そして、目・鼻・口の三点すべてが揃って「これは顔だ」と認識し、豊かに動く表情に接しながら、喜怒哀楽の感情を数ヶ月かけて学習していくことになる。驚くべきことに、生後六ヶ月までの乳児は、どの国においても、サルや羊の顔の区別ができる。ただし、このような動物の顔を見分ける能力は、生後十二ヶ月ぐらいで消えていくとされる（注3）。それは、母国語ではない音韻は聞き取れなくなっていくのと同じように、必要な情報を取捨選択することに能力が特化していくからだと考えられている。

さらに、乳幼児は生後六ヶ月ころから、相手の口元をよく見るようになる。口元の動きを真似し、言語を習得していくのだ（注4）。言葉という概念もなく生まれた乳幼児は、成長の過程で言葉を「発見」する。たくさんさんの音声の中から自分で単語を見つけ出し、それを使うとすることで言葉を覚えていく。つまり、言葉の発達には「相手の言っていることを理解したい。自分も話したい」という気持ちが生きてくるのが大事なのだ。そして、会話の中から、相手の言ったことに気持ちを向けることを学

んでいく。

生後六ヶ月から一歳になると、人見知りが始まるのが普通だ。人見知りとは、養育者以外の人と積極的にコミュニケーションを図ろうとした結果、養育者との違いを感じて怖いと思うのが原因とされる。人見知り期は、五感を総動員し、養育者との違いに気づきながら、多様な人を受け容れていくことを経験する大事な時期と言える。現代社会では、さまざまな言語や文化的背景を持つ人と日常的に接する機会があり、多様性を認め合うことがとても大事だ。それには、人と人との差異を「自然なもの」として捉え、偏見を持たない必要がある（注5）。多様性を自然に受け容れることのできる人に成長するためにも、乳幼児期において、共感できて嬉しい気持ちや、わかり合えずに残念に思う気持ち、それでも仲良くしたい気持ちなどを日常的に味わう経験が必要である。

3. コロナ禍に影響を受ける乳幼児の発育 《触れ合いの機会の減少による認知能力への影響》

乳幼児は豊かに動く表情に接しながら、人の気持ちを理解するようになり、密なふ

れあいの中で人間関係を構築していく。ところが、コロナ禍に生まれた乳幼児は、家族を除くとマスクをした顔しか知らず、家族以外の他者と密にふれあう経験も極端に少ない。そのことが乳幼児の認知能力の低下に繋がっている可能性がある。実際、冒頭で紹介したブラウン大学のデフォーニ博士の別の調査によれば、二〇二〇年半ば以降に生まれた乳児の認知能力は二七から三七ポイントも低下しているという（注6）。また私立勝田保育園の園長は、「この二年、人見知りしない子が増えている気がする。コロナ禍で成長している乳幼児が、他人の顔が区別できているのかと不安に感じる時がある」と述べている（注7）。

さらに、相手がマスクをしていれば、口の動きも表情も見えにくく、また声も聞きづらい。そのため、乳幼児は言葉を覚えるのに大きな苦労をしているはずだ。外出を制限されたコロナ禍にあつては、乳幼児がコミュニケーションを取ろうとする機会も限られる。書き出しで述べた、三歳までの乳幼児の言語機能が大きく低下している事実がよく理解できる。

こうした認知能力や言語機能の低下は、相手の気持ちを理解するといった、非認知

能力の発達にも影響していると懸念される。比治山大学・七木田万美教授が昨夏に保育士に行った調査によると、マスク着用による乳幼児の変化として「表情が乏しい」との回答が四六%、「発音に問題を感じる」も二〇%にのぼる（注7）。

《双方方向のコミュニケーションと言語能力》

また、コロナ禍では、乳幼児がテレビやスマホで動画を見る時間が増えた。新生児の頃からテレビを毎日七時間ほど見ていた女の子のことが報告されている（注8）。その子は三歳になっても言葉が出なかったが、テレビを見るのをやめると、数ヶ月で言葉が出るようになった。しかしながら、多くの三歳児が自分の要望を素直に相手に伝えようとするのに対し、その女の子は自分のことを他人事のように、評論家的に話す特徴がみられたという。言語能力の発達には、テレビのような視覚と聴覚のみに働きかける一方向的刺激では不十分なのだ。リアルな世界で、人と互いに言葉を交わす、双方方向のコミュニケーションが必要だ。

《社会との関わりと母子の孤立》

最後に、コロナ禍で過ごす母子は、社会

との関わりが希薄になり、孤立する傾向がある。コロナ禍の中で出産・育児を経験した産婦の二九%が産後うつ状態にあり、それ以前の割合から倍増している（注9）。さらに、コロナ禍において妻の出産から三ヶ月までにうつ傾向を示す父親も一七%にのぼる（注10）。このような養育者のうつ症状は乳幼児の表情や行動への自然な応答を難しくする。その後も子どもの情動調整、衝動制御、認知発達に影響を及ぼすとの報告もある（注11）。コロナ禍で育つ乳幼児は、家庭の問題も抱え、パンデミックの影響を最も強く受けた世代と言えるかもしれない。

4. コロナ禍において乳幼児の発育を助ける方策

乳幼児期は、どのカテゴリーの能力にとっても学習効率が低い、「感受性期」と呼ばれる時期に相当する。逆にこの時期を逃すと、さまざまな能力を伸ばすのが難しくなってしまう。例えば、人が社会で生きていくためには、「人と共感する」経験がどうしても必要だ。他人の心の痛みや喜びに共感する、共感力の高さが人がらしさとも言える。しかし、その経験が十分に得ら

れないまま、脳と心の発達に関する感受性期が過ぎていってしまったては、いずれ彼らが主役となる社会のあり方に大きな影響を及ぼす可能性がある。

前章で述べた、コロナ禍で育つ乳幼児の発育の遅れという問題を社会で広く認知し、早急に対策を取る必要がある。

はじめに断っておくべきことは、乳幼児のコミュニケーション不足は、オンライン上の仮想空間でのコミュニケーションでは解消することはできないということだ。京都大学・明和政子教授は、「ヒトは、他者との『密・接触』を基本とする社会的環境に適応しながら進化してきた生物です。今、コロナ禍で制限されている『密・接触』は、ヒトがヒトらしく生きていくために必要な脳と心の発達に欠くことのできないものなのです」と述べている（注12）。他者との関わりに「心地よさ」を感じる脳と心は、他者との身体接触の経験なくしては発達しないという。乳幼児には祖父母など世代を超えて多くの愛情が注がれ、同世代の子とふれあいながら育つ環境が必要だ。

そこで、コロナ禍における具体的な解決策として、以下の四つを提案する。

《表情に触れる機会をつくる》

乳幼児がいる世帯や幼稚園・保育園に透明マスクを配布するのはどうだろうか。フランスでは、保育園・幼稚園のスタッフ向けに、透明マスクが八〇万枚配布された。幼児教育・保育現場のスタッフや科学者たちが、メディアを通じて透明マスクの必要性を社会に強く訴えたことにより、政府による透明マスクの一斉配布が実現した（注13）。フランスの現場からは、「子どもたちが表情を一生懸命見ようとする」とか、「これまで見たことがないほどの、満面のほほえみを見せてくれた」などの報告があったという。乳幼児の発育にとって、人の表情をしつかり観察することはとても重要である。

透明マスクが有用なのは乳幼児だけではない。先日、私の通う中学・高校で二年ぶりにプールの授業が再開された。マスクをしていない友人と過ごす時間がとても懐かしくまた新鮮に感じられた。しかしコロナ禍が始まった後で入学した後輩からは、コロナ後に知り合った人の前ではマスクは取れないという話をよく聞く。皆がマスクで顔の半分を隠す状況がこのまま続くと、コロナ禍後でもマスクを外せない人が増え、

相手の表情を読み取りづらい社会になってしまうのではないかと心配になる。

フランスで配布されている透明マスクは、マウスシールドと違い、顔にフィットしていて飛沫漏れが少なく、マスク部分の八〇%が見えるようになっていて、高性能の透明マスクは日本でも製造されており、日本でもその普及が望まれる。

《密に触れ合う場を作る》

乳幼児にとってはふれあい、乳幼児の母にとっては社会とのつながりが大切だ。コロナ禍においても、マスクをしなくても安心して過ごせる場が望まれる。それには、来場者全員に抗原検査をしてもらう必要があるだろう。簡単な検査で五分から三分で結果が出る。全員が陰性の場合ならマスクをせず、世代をこえて気兼ねなく交流ができる。まずは児童館、さらには図書館の一角だけでも良いだろう。母親もほっとする場ができることで、産後うつ症状が軽減する効果もあるに違いない。東京都医師会理事の黒瀬巖氏によると、自覚症状のない人の場合、抗原検査のPCR検査との一致率は、陰性の場合九五%、陽性は一〇〇%という（注14）。抗原検査を行っても一

〇〇%の安全は保証されないが、これだけのリスクは、乳幼児の適切な成長のために必要だと、親子同士さらには社会全体で受け容れられる必要がある。また、検査には費用がかかるため、行政のサポートが必要だ。そのため、乳幼児の養育者、保育者、乳幼児発育の専門家などの声を集め、乳幼児の密なふれあいの場のあり方を検討する必要があるだろう。

《コロナ禍で不足するリアルなコミュニケーションを補う》

乳幼児の外出が制限され、人との交往りが十分に実現できない中、ベビーマッサー、合奏などそれを補うさまざまな工夫が考えられる。中でも、リアルな世界、空想の世界のストーリーを疑似体験できる、絵本の読み聞かせは特に効果的だ。それは言葉が育つと同時に、勇気や思いやり、想像力も育まれると言われる（注15）。出版業界を見ても、書籍の販売額が過去二〇年の間に半分にまで落ち込む中、二〇二一年の児童書の売り上げは前年比四%増加した（注16）。児童書のなかで三六%を絵本が占めており、コロナ禍において絵本の需要が増していると言える。乳幼児が一人で

デジタル絵本を見るのとは対照的に、紙の絵本は読み手と聞き手が同じペースで心を通わせながら読み進められるところに醍醐味がある。

《乳幼児に心を向ける時間を作る》

先日電車に乗ると、私はベビーカーに乗ったかわいらしい赤ちゃんを見かけた。その赤ちゃんはじっと私を見つめていたが、私と視線が合うとにつこりと、でも少しはずかしそうな笑顔を見せてくれた。周りには多くの大人がいたが、皆スマホをのぞいており、その瞬間のリアルな世界でこの赤ちゃんと心を通わせあっていたのは私のみであると感じた。その日はたまたまスマホを家に忘れてきており、スマホを持っていたら私も赤ちゃんの存在に気づくことがなかっただろう。赤ちゃんは笑顔を振りまいても気づく大人はわずかだ。皆がマスクをして、スマホをのぞいている世の中を、赤ちゃんはどのように見ているのだろうか。コロナ禍によりオンライン化がどれだけ進行しても、リアルなふれあいを必要としている乳幼児を決して置き去りにしてはならないと強く感じた。

そこで四つ目の提案は、乳幼児に心を向

けるため、大人がスマホを手放す時間を作ることである。精神科医が書いた、世界的ベストセラー『スマホ脳』(注17)によれば、「スマホ依存」と「うつ」に警戒すべきレベルの相関関係があるとされる。コロナ禍にあつて、スマホは外の世界と繋がるライフラインとなった。しかし過度のスマホ依存は、心の健康に必要な睡眠、運動、他者との関わりを奪う。前章で述べた、コロナ禍における産後うつの大きな広がり、社会の急速なオンライン化が一つの要因になっている可能性がある。時に皆でスマホを手放し、睡眠、運動、人とのリアルな交わりを取り戻すべきだ。乳幼児の養育者のみならず、社会全体でスマホ依存度を下げることが、乳幼児とその家族に意識を向ける機会を増やす。それが養育者をうつ状態から救う一因になると信じる。

5. おわりに

私たち高校生にとっても、高校生の時しか持てない「今」がある。私たちは、中止になった修学旅行の代わりに、生徒で企画したレクリエーション大会を精一杯楽しんだ。学外者が来校できなくなった文化祭でも、思いを込めて展示を行った。卒業式に

出席する代わりに、ビデオを作成して、卒業生にメッセージを送った。コロナ禍でもみんなで必死に高校生にしかできない「今」を実現させようとしている。一方、コロナ禍に育つ乳幼児には、高校生の私たちよりも、さらに失つてはいけない「今」があるのではないだろうか。自分自身では工夫のしようもない乳幼児に代わって、私たちが乳幼児の育つ環境があるべき姿に整える必要がある。

乳幼児の発育に必要な環境の再構築を急がなければならない。打ち上げ花火のような一過性の対策だけではなく、川の流れるような持続性のある取り組みが求められる。私自身は学校のボランティア同好会の部員として、毎回抗原検査を実施した上で、乳幼児と定期的に遊んだり読み聞かせをする場を作っていきたい。そして目の前の乳幼児とふれあうその時を大切にしていきたい。

参考文献

(注1) NHK Web特集 二〇二二年六月九日 「マスクの顔しか知らない子どもたち 大人ができることは」 <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220609/>

k10013660631000.html

(注2) 明和政子著『ヒトの発達の謎を解く』ちくま新書、二〇一九年

(注3) 山口真美「乳幼児は顔を区別する」日本心理学会ホームページ <https://psych.or.jp/publication/world090/pw04/>

(注4) 明和政子「ヒトの脳と心の発達を支える共同養育の役割」平和政策研究所ホームページ <https://ippiapan.org/archives/6233>

(注5) 山田千明編著『多文化に生きる子どもたち 乳幼児期からの異文化間教育』明石書店、二〇〇六年

(注9) Deoni, S. et al. "Impact of the COVID-19 pandemic on early child cognitive development: initial findings in a longitudinal observational study of child health." MedRxiv (2021). <https://doi.org/10.1101/2021.08.10.21261846>

(注7) 読売新聞オンライン、二〇二二年六月一日「成長の証しなのに『人見知り』しない子、マスクで顔が区別できないのでは」…「コロナ警告」ゆらぐ対人関係」<https://yomiuri.co.jp/national/20220631-OYT1T50026/>

(注8) 小西行郎著『赤ちゃんと脳科学』

集英社新書、二〇〇三年

(注9) 津野香奈美 神奈川県立保健福祉大学大学院ヘルスイノベーション研究科ホームページ「コロナ禍で出産・育児を経験した女性の『産後うつ』の割合が倍増」http://www.shi.kuhs.ac.jp/news/details_01448.html

(注10) 神戸新聞NEXT、二〇二二年七月四日「父親の『産後うつ』やうケア：育児と仕事両立、弱音吐けず」<https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/202107/0014471472.shtml>

(注11) 吉田敬子「妊産婦と乳児の精神保健と地域での育児支援」母子健康協会ホームページ https://jp.glico.com/boshifutaba/no77/con01_01.htm

(注12) 時事ドットコム、二〇二二年十一月六日「コロナ禍が子供の脳と心に及ぼす影響」マスク社会のリスク」<https://www.jiji.com/jc/v4?id=2110myowa0001>

(注13) 都田ミツコ「マスク育児」が子どもの発達に影響？ 親・先生の表情がよいめなリスク」<https://joshi-spa.jp/1060397>

(注14) 千葉雄登 m3.com ホームページ「抗原定性検査」臨床的に十分な一致率」都

医が大規模調査」<https://www.m3.com/news/open/tyoshin/1041769>

(注15) 寺島知春著『非認知能力をはぐくむ絵本ガイド180』秀和システム、二〇二二年

(注16) 畑中梨沙「拡張する絵本の世界」(前編) KDDI 総合研究所 <https://www.kddi-research.jp/topics/2020/022802.html>

(注17) アンデシユ・ハンセン著 久山葉子訳『スマホ脳』新潮新書、二〇二〇年